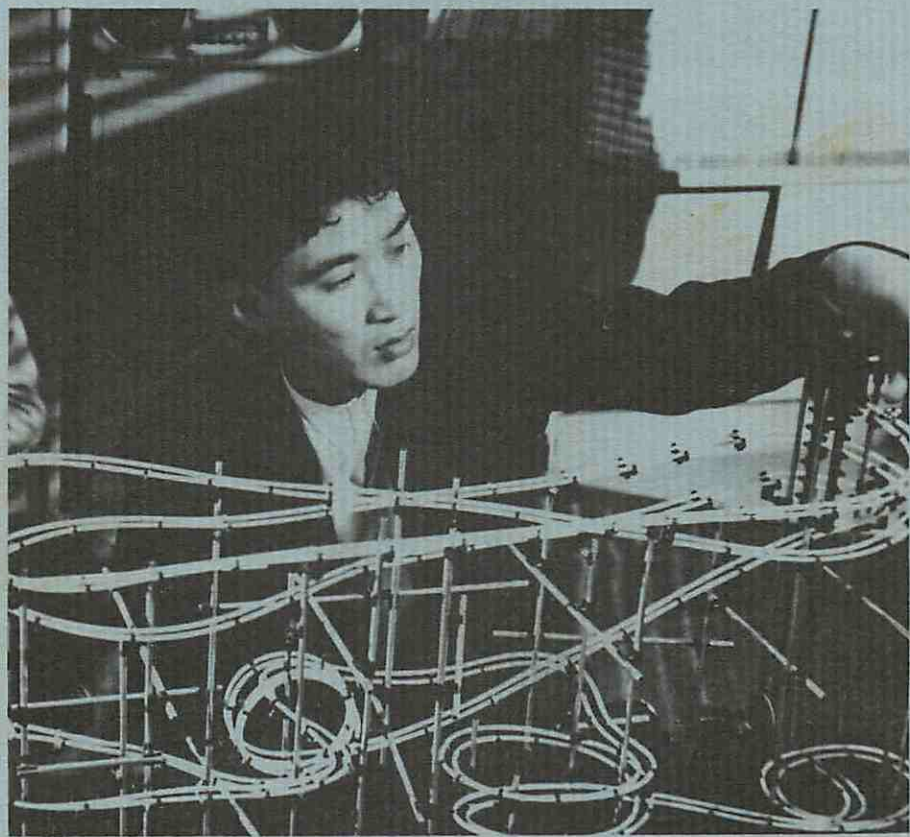


第5回

# ヨコハマ映画祭

映画ファンのための熱いまつり



●主催 「ヨコハマ映画祭」実行委員会

## 第 5 回 ヨコハマ映画祭

昭和59年1月29日(日曜日) 神奈川県立青少年センターホール

### ● 特別招待作品

「ボクのおやじとぼく」(中原俊監督)

前回のヨコハマ映画祭で新人監督賞を受賞した俊鋭中原俊の83度秀作。「児童映画の中で自らの世界を構築した快作。中原監督の並々ならぬ手腕を見ることができると評される映画ファン必見の注目作。」(映画評論家 野村正昭氏)

### ● 1983年度 優秀作品上映

「時をかける少女」(大林宣彦監督・最優秀新人賞 ベストテン2位)

「家族ゲーム」(森田芳光監督・作品賞 監督賞 脚本賞 主演男優賞 助演男優賞)

### ● 個人賞表彰式

各賞受賞者出席

### ● 「明日に飛翔せよ」日本映画

1. 新進スター座談会 吉宮君子・青木琴美・仁科まり子・佐藤志穂 他 (予定)
2. 83年日本映画をふり返って

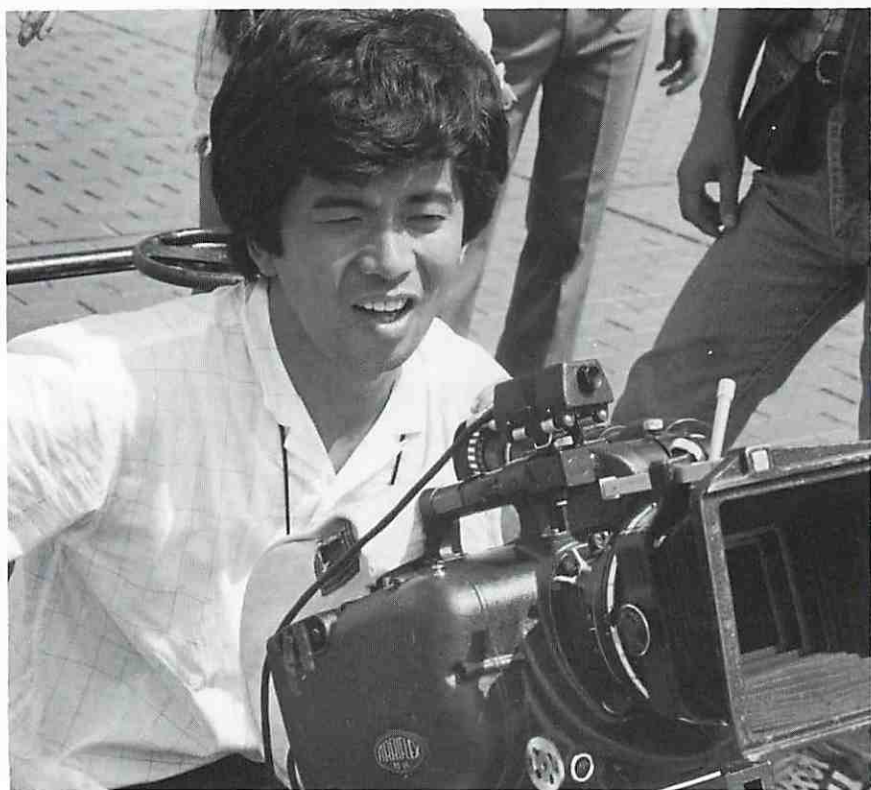
北川れい子・内海陽子 他 若手映画評論家座談会

ヨコハマ映画祭は、横浜在住の映画ファンが中心となり、企画、運営、実行すべて日本映画を愛する若いファンの手によって行われる映画祭です。

選考委員は、若い映画評論家やファン33名で、筋金入りの映画狂ばかりで構成されています。

そして、表彰式を頂点に素晴らしい仕事をなした映画人と映画ファンの熱い交流の場を作りだそうとしています。

### ● 主催 「ヨコハマ映画祭」実行委員会



監督賞 森田 芳光（「家族ゲーム」）

新人監督賞をいただいた時点で  
ターゲットにしてました賞なので  
喜びもひとしおです。  
本当にどうもありがとう。



新人監督賞 崔 洋 一 （「十階のモスキート」）

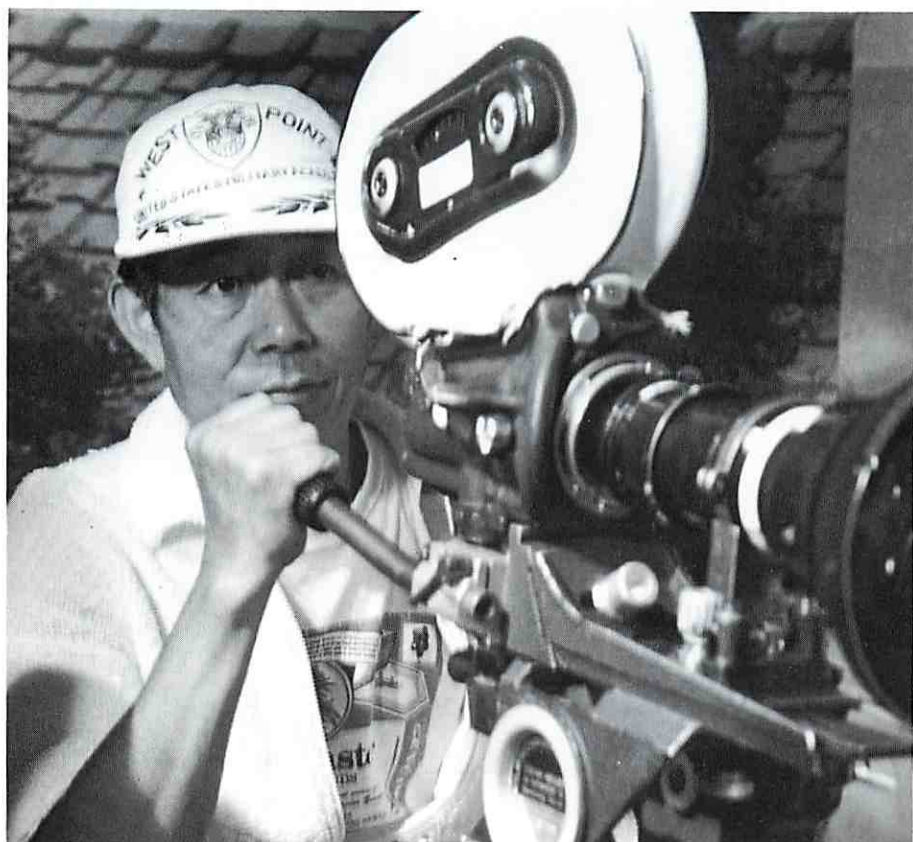
「十階のモスキート」が世にとび出して以来、様々なことがありましたが、思いもかけない今回の受賞に卒直によるこびを表わしたいと思います。ややもするとストレートに物をいうことが好まれない状況は、映画の世界においてもムエンではありませんが、ボク自身はもうしばらくはこんなバカをつづけたいと思っています。



脚 本 賞 森 田 芳 光 （「家族ゲーム」）

この賞によって、自信がつき、僕の脚本が  
飛躍的に面白く、大きくなる気がします。  
他の監督にもどんどん作品を提供できるよ  
うにガンバります。

（写真は、撮影の前田米造氏と）



撮影賞 前田米造（「家族ゲーム」）

数多い作品の中から、「家族ゲーム」を選出して下さいましたファンの皆様方に心から感謝致します、と共に大変嬉しく思っている次第です。又、撮影の裏ではスタッフ全員の汗とホコリの結晶が、一コマのフィルムに焼込まれた結果です。

本当にありがとうございました。



主演男優賞 松田優作（「家族ゲーム」）

ヨコハマはいいねえ。漢字の横浜もいいけど、カタカナのヨコハマは、もっといいねえ。

いい男といい女が似合うんだねえ。

だからそろったよ、今回は。

ヨコハマ映画祭のポリシーがはっきり見えるよ。

2回目ん時よりうれしいよ。

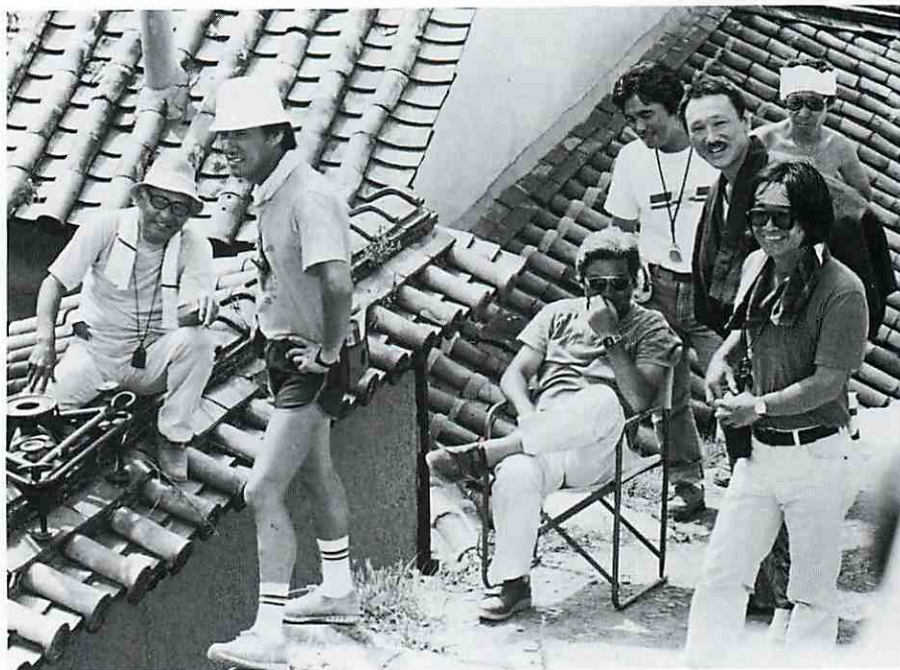
金子が生きてたら、中華街のコーちゃんとかで腸詰のうまいやつと、老酒で乾杯して、ほろ酔い気分でニュージーランドのバーに行ったら、ハバナクラブのラムのソーダ割りに思いっきりレモンしぼってもらってシュールに浪花節っちゃうんだけど、もういいねえから。かわりに、崔と、川島と、暎子ちゃんと四人でニュージーランドいってくるよ。（森田も米造さんも伊丹さんも、そして角川のおとうさんも、クーッ、このーって飲みたいね。）

乱筆乱文の松田優作



主演女優賞 永島暎子（「竜二」）

「竜二」は、金子正次さんに会い、ひきずられ、やりとげられた仕事でした。金子さんの情熱が映画の中に結実したもので、私にとって金子さんとの出会いが最大の出来事でした。私の賞を、亡き金子正次さんに捧げます。



助演男優賞 伊丹十三（「家族ゲーム」「細雪」）

自分の仕事を少し考え直そうと思って、今年は映画を（といってもほとんど作家論の対象になるような旧作ばかりですが）二百本ばかり見ました。そうして、画面的といいますか、映画的な時間、空間の中での自然な演技というものをあれこれと考えながら仕事をしてまいりました。そのあげくにいただいた賞ですからとりわけ嬉しいのです。これからも映画史（といっても書かれた映画史ではなく、映画館で上映されている映画の中にある映画史）の巨大な時間の中で、豊かな細部のために働いてゆきたいと思っています。

ただし問題は多いのです。コダールは、俳優というのは表現することしかできない、一種の家畜のようなものだ、といっておりますし、ブレッソンも、俳優というのは常に外へ向かって自分を放出する、しかし本当の人間は蓋をした瓶と同様、閉じた存在でなければならない、といっておりますよね。そのへんをどう考えてゆくか、これが今後の私にとって最大の問題になるでしょう。

（写真 右から3人目が伊丹十三氏……「瀬戸内少年野球団」のロケ風景）



助演女優賞 田中 美佐子（「丑三つの村」）

昨年の仕事の中で、一番思い出に残った作品で今回の賞をいただきましたことを、大変うれしく思います。

今年は主演女優賞めざし、がんばります。

本当にありがとうございました。



最優秀新人賞 原田知世（「時をかける少女」）

大林監督をはじめとしてたくさんのスタッフの方々に支えられて、無我夢中で演技しました。

今は信じられないという気持ちと嬉しい気持ちでいっぱいです。

大林監督・スタッフの方々に心から感謝します。

そして、ファンの皆様ほんとにありがとうございました。



最優秀新人賞 宇沙美 ゆかり（「みゆき」）

この度、ヨコハマ映画祭最優秀新人賞をいただき、ほんとうにどうもありがとうございました。何もかもが初めてだった私が、一生に一度のこのような素晴らしい賞をいただけたことは、全て「みゆき」のスタッフ・キャストの方々のおかげだと思い、改めて感謝の気持ちでいっぱいになっています。

これからもこの賞をいただいたことを誇りとして、一生けん命がんばって行きたいと思います。ほんとにどうもありがとうございました。



自主製作映画賞 「竜 二」 (川島 透 監督)

撮らずにはいられないという熱と勢いで完成させた「竜二」。  
出来上がった映画は上映されなければ意味がないと一層勢いづいた「竜二」。  
上映が決まり、あとは成功させるだけだと突走った「竜二」。  
大勢の人達のご支援を受け、今回の受賞の喜びへと至りました。  
ありがとうございます。 (プロダクション RYUJI)



特別大賞 前田陽一

喜劇一筋20年、常に刺激的な作品を贈り続けてくれる名匠に映画ファンより愛をこめて――。

初めてもらった賞が、私が永年住んでいる横浜の映画祭の賞であることをとてもうれしく思います。

それにしても「特別大賞」というのは少々面映ひいです。どこかシャレのような感じもしますが、ここは横浜の映画ファンの方々の、私に対する激励の言葉と素直に受けとめ、御期待に沿うよう頑張りたいと思います。



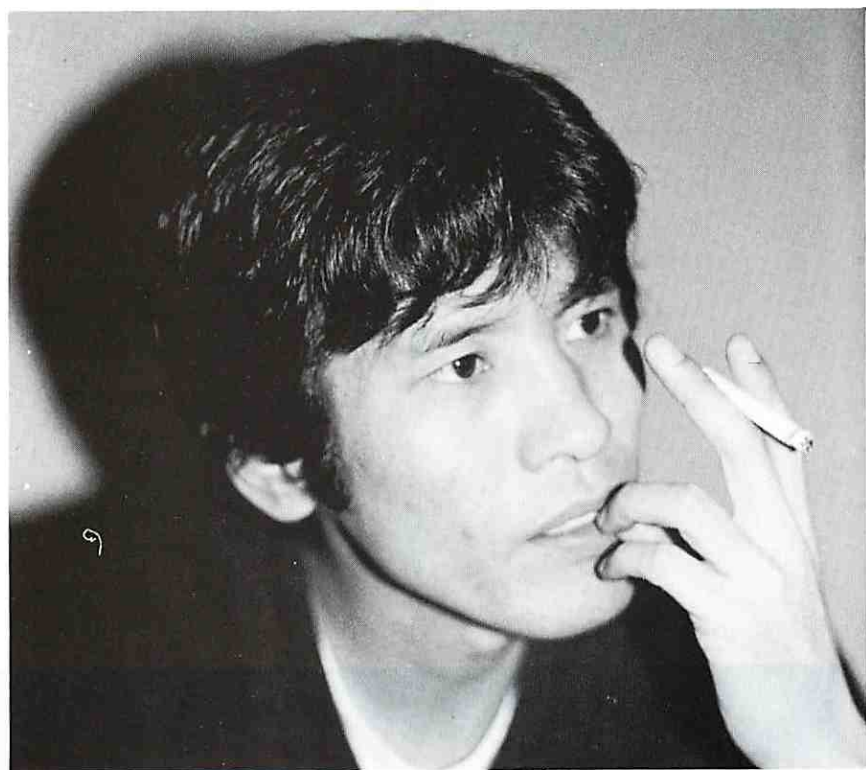
特別大賞 角川春樹

圧倒的なパワーで進撃を続ける現代日本映画界のリーダーに映画ファンより敬意の念をこめて――。

リスクのない人生に興味がないように、リスクのないビジネスに興味がない。映画は、最もリスクに満ちたビジネスであり、人間の感性や感情に訴えるエンターテインメントである。

「蒲田行進曲」で数々の賞を取ったことよりも、「汚れた英雄」を演出したことの喜びの方が、はるかに強い。それは、作品的にも興行的にも成功しなければならないというプレッシャーが、生きているという実感につながるからだ。

ヨコハマ映画祭は、マニャックでマイナーの感はぬぐえないが、活気に満ちていて、メジャーの映画賞より面白い。そこから、何らかの意味で賞がもらえることも、私にとって嬉しいことの一つである。



審査員特別賞 故金子正次

一瞬の煌きを残して逝った日本映画乱世の風雲児に心からの哀悼の意をこめて——。

“僕は芝居や映画やってなければ、例えば、3年以内に都内に家建ててやる、みたいな感じはある。

ただ、ずっと芝居をやっていたわけだから、金子正次という名前が皆さんの頭の中に残るようなことぐらいは……それは有名になりたいということにも繋るんでしょうけれどね。1回ぐらいは成ってみたいというか、そういうの、あったのかなあ……”

こんなことを言っていた金子です。

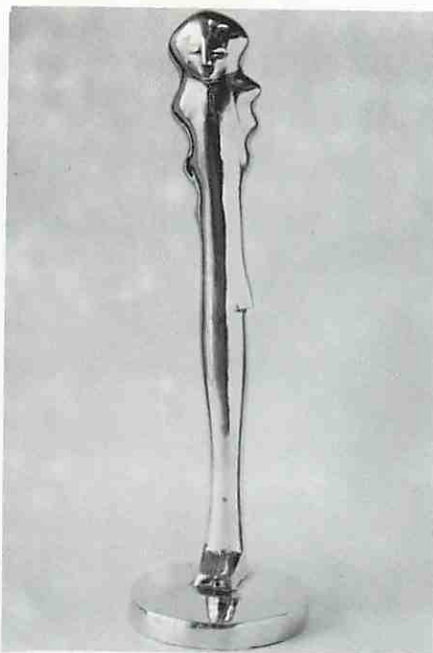
喜んでいるでしょう。喜んでいます。

この度の受賞を、確かに、金子に報告いたしました。

本当にどうもありがとうございました。

金子朋子（金子正次氏夫人）

ヨコハマ映画祭 オリジナル・トロフィー



関 玄 氏 作



去年の表彰式から  
(横浜市民ホールにて)

## 第 5 回 ヨコハマ映画祭

### '83 年度 ≪ 個人賞 ≫

作 品 賞	「家族ゲーム」	森田芳光監督・にっかつ撮影所 ニューセンチュリー・プロデューサーズ アート・シアター・ギルド製作 日本アート・シアター・ギルド配給
監 督 賞	森 田 芳 光	(「家族ゲーム」)
新人監督賞	崔 洋 一	(「十階のモスキート」)
脚 本 賞	森 田 芳 光	(「家族ゲーム」)
撮 影 賞	前 田 米 造	(「家族ゲーム」)
主演男優賞	松 田 優 作	(「家族ゲーム」)
主演女優賞	永 島 暎 子	(「竜 二」)
助演男優賞	伊 丹 十 三	(「家族ゲーム」「細雪」)
助演女優賞	田 中 美 佐 子	(「丑三つの村」)
最優秀新人賞	原 田 知 世	(「時をかける少女」)
最優秀新人賞	宇沙美 ゆかり	(「みゆき」)
自主製作映画賞	「 竜 二 」	川島透監督・プロダクションRYUJI製作 東映セントラルフィルム配給
特 別 大 賞	前 田 陽 一	喜劇一筋20年、常に刺激的な作品を贈り 続けてくれる名匠に映画ファンより愛を こめて——。
特 別 大 賞	角 川 春 樹	圧倒的なパワーで進撃を続ける現代日本 映画界のリーダーに映画ファンより敬意 の念をこめて——。
審査員特別賞	故 金 子 正 次	一瞬の煌きを残して逝った日本映画乱世 の風雲児に心からの哀悼の意をこめ て——。

作品賞 「家族ゲーム」

生きていくことへの軽やかな意志

尾形敏朗

15歳の頃である。ほくの父と母は、もともと他人同士——そんな当り前の事実にくちがついたら、とても気持ちが悪くなってきたことがある。海より深い親の愛だ、血はトマトジュースより濃いだと言ってはみても、家族

はアカの他人が結んで作った関係。だったらベタベタの愛情やグチャグチャの絆で迫ってくるなよな。反抗心の根拠を見つけた嬉しさがあつたけれど、一方では愛しさも増した。親だって淋しいんだ、という思いやりである。たぶん自立とは、親を他人と認めたときからはじまるの

だろう。僕は今そう思う。

核家族や都市型社会、管理社会の進行、受験地獄といったことをジャーナリズムは深刻に書きたてる。だが僕たちは本当に悲惨な状況を生きているのだろうか。大地震や食糧・エネルギー危機が叫ばれても、一応の平和の

中でとりあえず生きている。過去に帰りたいのでもなく、未来に夢を抱くのでもない。それが現代ならば、まず僕は楽しく生きてみる工夫を考えるべきなのである。

「家族ゲーム」という題名は、家族それぞれが役割をきちんと演じてみせることで、一般標準の家族関係を保つていく、ゲームの知恵を言ったものだろう。高層団地に住む典型的中流核家族、沼田家。その平凡な日常に、風変りな家庭教師、松田優作が現れる。そして次男の茂之を志望校に合格させると去っていく。それだけの話なのに、映画を見ながら僕は何度ワクワクしたことだろう。シニカルな構図、効果的なロングショット、機智に富んだセリフ、意外なアクションの連続に何度笑ったことか。現代への痛烈な風刺とか警鐘とか理屈をつける前に、ともかく面白い、おかし。

積木をくずすほど落ちこぼれる勇氣とでないフツの中学生、茂之が、家庭教師からハードボイルドに学んだもの、それは現代自立の心得あるいは家族への気配りのすすめ、といったものである。決して家族の一員であることに頼らない。出しゃばらず、逆らわない。ほどほどの心配は作ってあげる。それが、いちばん隣りの他人たる親に対しての、子の最小限度のエチケットというものだ。

映画は、ある自虐をこめて僕たちに現代をレクチュアしてくれた。だが、これは悲劇ではないのだ。家族の比

重を均等に四分割した横一列の食卓の構図。(名シーンとして語りつがれるだろう。)相手と自分との距離を測りながら索制するように交される会話。ヘリコプターの不気味さに気づきながらも昼寝ができるという閑かさ。ゆがんでると言ってはならない。新しいのだ。「家族ゲーム」に僕は、生きていくことへの軽やかな意志を見る。時代が閉塞したとはいえ、僕たちの時代はここしかないのである。

(映画評論家)

## 「時をかける少女」論

知世<sup>マドンナ</sup>聖女のほほえみに魅せられた男たち

塚 崎 直 美

「愛の子感のジュブナイル」それは、どうやら彼にとって「初恋の記憶のジュブナイル」だったらしい。26歳の商社マンが、あの日以来狂ってしまった。1日に3度

も観て、ポスター、プロマイド、サントラ盤を買いあさった情熱は、数ヵ月たった今でも変わらない。会うたびに「月モモ、クリ三年、カキ八年、ユズは九年で成り下

がる……”と口ずさむ。レコードを聞きながら眠りにつき、そして目覚めればポスターに唇を寄せるのが日課だという。そのうち、とうとう尾道へ旅立ってしまった。因みに彼は、かつての自主映画「冬枯れの町」の作家である。(キャハッ／＼バラしてしまった) 彼いわく、「知世チャンは忘れかけていた中学、高校時代に僕をひき戻し、純でナイーブなあの頃の感性、数々の思い出を蘇えらせる女の子」なのだそうだ。映画を観るまではチビでヤセでチンケな顔のヤツだ、などのたまわっていたくせにである。

また、某誌の編集者で、箱根の強羅からおりてきたばかりのようなムサッくるしい風貌の男(28歳)も、知世を見ながら、ヨダレをたらさんばかりに相好をくずしている。

私は日々、人格が豹変したこの二人の男をながめつつ、無気味な思いにかられている。なにしろ、原宿ピテカントロブス界限、新宿ツバキハウス界限の刈りあげ娘を見ている。「Shit!」青山のカフェ・バーでJJしているオールナイトフジ風の女子大生を見ては、怒りに震える拳でテーブルを叩く。セックスを感じさせる女はダメだと力説する。純愛が肉欲に勝ってしまったのだ。

なんてことだ!でも、知世、あなたは自分の犯した罪

に気づいていない。それほど純で透明だから……。今頃、何くわぬ顔でスウェンセンズのアイスクリームなんか食べてるんでしょね。

南国、九州出身にもかかわらず、南沙織から早見優へとつながるトロピカルなものは一味違うさわやかさ。おすましすればフツの子、ニッコリ笑えば、ゾクッ。そんなあやかしの少女、知世の魅力を最大限に生かしたのが「時をかける少女」なのだ。

角川事務所の緻密な女優育成術、金太郎アメのようにどこを切っても大林印が出てくる映像術が溶けあって生まれた「時をかける少女」。泣ける。自主映画をやったことのある人なら、カーテンコールのシーンは特に泣けるに違いない。

本当に私たちはなんてチャームिंगな映画に出会ってしまったんだろう。



(雑誌編集者)

監督賞・脚本賞 森 田 芳 光

## モリタ監督の新しい映画世界

林 真木 夫

昨年の正月に森田監督から年賀状を戴いた。無断ではあるが紹介させて戴く。曰く

モリタはホームランが打てるのか

モリタは有馬記念に出られるのか

モリタはウィンブルドンに行けるのか

モリタはエイトビートしか出来ないのか

モリタは友達としてしか愛せないのか

様々な疑問が投げかけられていますか

83年モリタはその全てに答える用意があります

その答えが堂々のベスト1「家族ゲーム」であったし、ホームランどころか、作品賞・監督賞・脚本賞の三冠王を獲得する大活躍ぶりであった。このユーモラスで毒のある、しかも全てが春の夢であったかのように笑いとばすブキミな映画については、尾形氏の文章があるので重

復を避ける。ここでは、「の・ようなもの」「家族ゲーム」等の優れた作品を編み出すモリタ監督の映画作法あるいは映画文体について述べてみたい。

一言でいえば、モリタ監督の独自性は映画に対するポジションのとり方、即ち自身の作品を観客の眼で見ていることにあるのではないかと思われる。作り手側の自己満足や得手勝手は一切なく、観客に迎合するのでは決してないがサービスピ精神にあふれ、我々が見たいと思うショットを次々に繰り出す。映像による殺し文句のヒットパレードを通じて自分の映画世界を構築している、そんな気がする。しかも、例えば「家族ゲーム」ラストのあのヘリコプターの音ノったそれだけで、観客が馴染んだその映画世界を全く様相の違う異次元へと変えてしまふ、というウレシイことまでやってのけてくれる。或る

いは「の・ようなもの」のラスト、ただどしどしはあるが情熱的なシントトの青春に訪れるあのリリズム。モリタ監督はスクリーンの向う側にはなく、我々観客のウシロに居て、我々とともに画面に一喜一憂し、最後に我々の首筋に手を伸ばしてくる、映画作家なのである。

森田芳光、この若い映画作家は撮影所の徒弟制度の体験もなく、16ミリ作品の経験もない。その若い監督が松

田優作、伊丹十三などの大物を軽々と演出し、現場に緊張関係を創り出し、緻密な計算で一本の作品を完成させていく。スゴイと思う。そして冒頭の年賀状にあるように、確固たる自信に裏打ちされているのだ。また我々は今年も、モリタ監督の84年の答えに熱い拍手を送るだろう。更なる新しい映画世界に。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

新人監督賞 崔 洋 一

待 っ て いた 男

鈴木 義 昭

崔さんと初めて会ったのは、山口清一郎監督のATG映画「北村透谷・わが冬の歌」の製作の渦中でのことであつたと思う。あの頃、ボクたちは、日活ボルノ裁判の傍聴で知り会ったその被告たる山口清一郎監督の新たなたたかひに微力ながら応援しようと、さまざまに活動していたものだった。崔さんは、若松プロと大島組がド

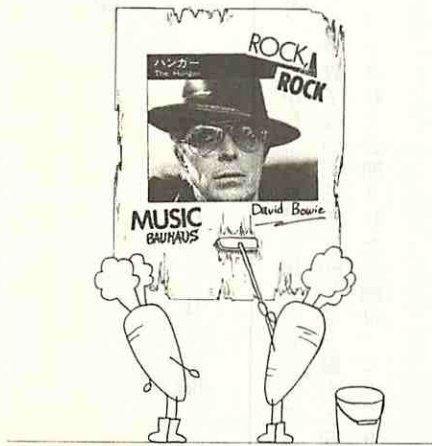
ッキングしてつくられたようなそのスタッフチームをグイグイとひっぱって行く激しいチーフ助監督であつた。そして、日活ボルノ裁判と同じく傍聴を続けることになつた愛のコリィダ裁判の大本の映画「愛のコリィダ」のチーフ助監督でもあつた。かの大島渚の下でならしたスゴ腕は、独立プロの世界にその男ありと言われていたの

だ。だが、ボクたちは待たねばならなかった。「十階のモスキート」は、そんな崔さんらしく、激しさの中にもこまやかさのあるセンセーショナルムービーであった。いつ、監督デビューするのか、と心待ちに待ったかいたが、あった。内田裕也兄ィも、「タコをなめんなよノ」って感じで、崔さんと息もピッタリだ。ヤツァゼ崔さんノって叫ばずにはいられなかった。待っていた男が、遅れに遅れたものの豪華なみやげを抱いてやって来た時の感動に似ている。

七八年三月三日だ。ボクたちは、日活ボルノ裁判、愛のコーリダ裁判、キネマ旬報裁判の3つの映画裁判を結んで、それを映画観客の位相から連動するシンポジウムを池袋の文芸座でおこなった。オールナイトで、多数のパネラーに取捨をつけきれず、ミスっている我々を崔さんは終始はげましてくれたのをおぼえている。今にしてみれば、いろんなことがあったんだと思う。最近に、何度か偶然、崔さんと飲む機会があった。「どうしてるんだ、ガンバレよ」という顔で「コラ、よしあきノ」と話しかけて来てくれる。いつも、酔っぱらってしまっているボクは、シドロモドロに、あるいは必要以上に大声でバカなことを言っていて崔さんのヒンシュクをかってしまっている――。

ボクたち、ならぬボクの、日活ボルノ裁判やら愛のコーリダ裁判やらナンヤラカンヤラ、ズームアップまで続く映画観客運動の戦線に、いつも、崔さんはかるやかに手をふって現われるホンマモンの兄キである。ディレ・カンだニューウェイブだというのが、崔洋一こそはるかむかしからボクのニューウェイブであった。今度は酔わないようにします。おめでとうございますノ

(フリー・ライター)



撮影賞 前田米造

## 暖かさに包まれた好奇心

野村正昭

例えば、山城新伍監督「女猫」を見ると、プロデューサー・岡田裕、撮影・前田米造、照明・川島晴雄、録音・木村英二、編集・鈴木暁といった、にっかつ撮影所生え抜きのスタッフの技術に、脚本・内藤誠、桂千穂、監督・山城新伍、出演・伊藤幸子という「俗物図鑑」のメンバーの発想が見事に溶けあい、軽快な画面を作りだしているあたりに、明らかに日本映画の新しい方法論が見える。「ミスターどん兵衛」に続く山城新伍監督の第2作とだけ見れば、「女猫」の面白さは半減してしまうだろう。

83年も、前田米造さんは撮りに撮った。82年に撮影を終えたり、84年に公開が持ち越されたりした作品を含めても、「俺っちのウエディング」「家族ゲーム」「3年目の浮気」「女猫」「ときめきに死す」「人魚伝説」と

実に6本。しかし、これは前田さんにとって、さして珍しくもない数字なのだろう。80年に「撮影・前田米造」とクレジットされて公開された映画は、なんと9本にもなる。

僕自身が、前田さんの名前を意識しはじめたのは遅く、79年の「赫い髪の女」「もっとしなやかに、もっとしたかに」あたりからなのだが、過去5、6年の公開作品リストを調べてみても、年に6本程度はザラなのである。いちいち作品名を記す余裕がないのが残念だが、あの作品も、あの作品も、前田さんが撮影されたのかと改めてビックリさせられた。共通して感じられるのは、きわめて明度の高い映像の美しさであり、人間やオブジェに対する人一倍強い好奇心であり、その好奇心があくあき強い刺にならずに、きわめてバランスのとれた暖かさに

包まれている。光や構図の美しさが対象に優先することなく、映画の面白さそのものに自然に収束されている。「家族ゲーム」で前田さんという撮影者がにわかにな目されたのではなく、当然ながら前田さんによって「家族ゲーム」の映像は磨きあげられ、傑作たりえたのかも知れない。

「家族ゲーム」に続く森田芳光監督とのコンビ作「ときめきに死す」では実際にため息の出るような美しい映

像が次から次へと登場し、この不思議な映画の雰囲気が大いに盛りあげていた。今夏公開される薬師丸ひろ子主演「メイ・テーマ」でも前田さんは森田監督とコンビを組む。この稿を記す寸前に、森田監督が書いた「メイ・テーマ」の脚本を読むことができたが、これはまぎれもなく秀れた脚本であり、さて前田さんの作戦は……。

(映画評論家)

主演男優賞 松田優作

不良をやめない男

内海陽子

そもそもインタビュの仕事がエンで、映画関係の文章が書けるようになったのだから、いいかげん、インタビュがうまくなってもよさそうなものだが、一向に進歩しない。それどころか、いい話をきくということと、いいインタビュー記事をまとめるということとは必ずし

も一致しないのだということがわかってくるにつれ、益々困難を覚えるようになってしまった。で、自然とそういう仕事から遠去かるようになってしまったのだが、ほとんどためらわずに「やりますよ」といったのが、松田優作インタビューだった。

いやあ、むずかしかったよ。ああ、いい話をきいてるなあという思いと、いい記事にはならないなあというセコイ感情とが同時に存在していたのだ。人間、心を許すと、話の内容は単なるグチと紙一重になるのではないかと思う。そういう話を、それらしく記事にするのがどうにも苦手なのだ。松田さんの場合、いい話というのはたとえばこうなのだから。

「ボクなんて、そこに向って突き進むなんてのがないでしょ。光とか風とかありとあらゆる自然のものに影響されながらやっていくもんだから。それが『探偵物語』のように全部さえぎられて人工的な光だったりすると、ヒジョーにヤバイ。どんなに自然の中に置かれても、中味は人工的な自分を作らなくちゃならないということだとバランスが悪くてね。で、バランスの悪さを自分がわかっているだけにマズイというか。本当にバランスが悪くなるとわからないわけですから。わかんなくなってしまう、ということがナイのがツライ」

「意外に、すぐ目の前にあるのに、すごく遠くにあるような気がして、全力疾走して、汗かいて、無かったなあなんて戻ってきたら、なんだ、ここにあるじゃないかという、そういう繰り返しがあるわけでしょ、ボクらの。1回走ってみなきゃ、向うまで行ってみなきゃ、そこに

あることに割と気がつかないことが多いんだよ。それが要するに「距離感」でしょうね。すぐ見つかってしまうことより、そこまで走って、そこに無くて、戻ってきてそこで捕えることに、汗かいてたとか息が切れてたとか髪が乱れてたとか、同じ「捨う」という作業にしてもずいぶんちがいますよね」

このくだりを、私は一番感動してきいたのだが、活字化することによって消えてしまうもの、変質したり、誤解されてしまうものがどっさりありそうで、ついに書くことができなかつた。今、この時点でも不安である。

しかし、こういう話を、あの『家族ゲーム』の快演を見たあとにきき、この話のあとで、あの『探偵物語』を見たとしたら、これはもう、惚れてしまうしかないじゃありませんか。

「映画って不良性感度の強い商売ですから。いくつ不良の組み合わせを持って現場へはいるか、いくつヤバイ橋を渡るかってことでしょ。それが全部鉄でできてたりすると困るんだよね……(笑)」

(映画評論家)

主演女優賞 永島 暎子

## 永島 暎子のあの笑顔

北川 れい子

△特筆すべきは女房役・永島暎子の哀しいまでにやさしい笑顔である。竜二を信じ、竜二にすがり、竜二を励ます彼女の純なる笑顔を見てみると、ひょっとしてこの無言の笑顔こそが、竜二の陥穽ではなかったかという思いすらわいて来る。女が自分を無にして男に笑いかけることの、不気味な重圧感……。▽

以上は、私がこの8月から『漫画ゴラク』誌上に連載を始めた「シネマ・スケッチ」からの抜き書きだが、さらに加えるならば、永島暎子のあの笑顔がなかったら、映画「竜二」は、そして金子正次は、あれほどの共感と説得力を持って、ヤクザ世界へと帰還できなかったに違いない。

永島暎子は、いや女は、あそこまで無垢なる笑顔は、我が子に対して以外、絶対に見せてはいけないのだ。ま

して愛している男へは、なおのこと。あの笑顔には、向けられた相手が骨抜きになってしまふような、全エネルギーが吸いとられてしまふような、有無をいわさぬ磁力があり、もしあのまゝ、竜二が永島暎子の笑顔をストリートにあびていたならば、彼女を殺すか、自分が死ぬか、そして映画「竜二」は中途半端なヤクザの非更生譚になつていただろう。

実は、なんの予備知識もなく「竜二」を観て、妻に扮した永島暎子を観て、すぐに、まだ記憶に新しい柳町光男監督「さらば愛しき大地」の秋吉久美子を想い浮べたのだった。

秋吉の演じた女も、根津甚八を信じ、すがり、勵ましていたが、竜二のようにたとえヤクザ世界にしろ、帰る道のない根津甚八は、その無限ともいえるやさしさの磁

力から逃れるべく、秋吉を殺してしまふ。秋吉の、ちょっとおびえたような、自分を相手にまかせきった笑顔と、まさに永島暎子は同じ笑顔を持っている。

ただ幸いなことに永島暎子は、秋吉久美子ほどスタアではなかったから、一切の雑音なしに「竜二」に溶け込んで、それがまた竜二をヤクザ世界へと帰還させる最大のリアリティとなり、それにしても一人の女優の存在が、ドラマの真実のすべてを握るカギとなろうとは……。そ

れほど永島暎子は素晴らしい。

永島暎子のあのいじらしい笑顔には、男を日常へと閉じ込める受身の攻撃性ともいったものが満ち満ちていて、竜二ならずともせつなくやるせない。とまれ「竜二」は、金子正次が文字通り、命をかけて、女優永島暎子を誕生させた作品といっても過言ではない。

(映画評論家)

助演男優賞 伊丹十三

シヤレた 感覚

金子正且

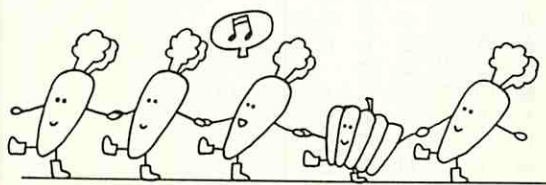
私は伊丹十三という人のことを具体的には全く知らない。たとえば何年何月に何処で生れたとか、何時映画界に入ったのかとか、そういうことは全然知らない。たしか前は伊丹一三という名前だったのがいつのまにか伊丹十三になっていた。多分その頃から私は俳優伊丹十三に

ひどくこだわらようになっていた。彼の父上は伊丹万作というその昔の有名な映画監督で数々の名作をものにされたと聞かすが、さすがにこの年よりの私もその作品は見えない。ただ聞くところによると、作品のセンスがモダンで非常にシャレていたらしい。伊丹十三に対して私

がいつも思っていることは、シャレた人だな、ということなのだ。どの役をやってもみんなシャレている。パタ臭いというんでもないし、日本人離れしているというんでもない、強いていえばエイリアン（異星人）みたいな感じなのだ。はじめの頃、この人は時代劇なんか絶対出ないんじゃないかと思っていたら、いつの間にかテレビの忠臣蔵の吉良上野介なんかやっていて、それがとてもシャレた上野介で、その他の時代劇、その殆んどは悪役のようだったが、それも結構シャレた悪役になっていた。しかし伊丹十三の真価はやはり映画で発揮されていたと思う。エイリアンっぽい人だからどの映画に出ても目を引いた。その最高が「家族ゲーム」だ。「家族ゲーム」では全員がエイリアンみただけけれど、伊丹十三はあの不思議な父親の役を実に楽々とやっけて、彼のシャレた感じが伊達ではないことを説明した。彼独得の表現が見事にきまっていて、益々この人の実体が解らなくなってしまう。こういう俳優は素晴らしいと思う。「細雪」の役も面白かった。日本美の発見みたいな映画の中で、岸恵子と伊丹十三の夫婦は実にシャレていて国際的で、それが市川崑の演出とピタリと息があって、一時代前の物語をモダンな今日的喜劇に仕立てる要素になった。藤田敏八とか森田芳光、市川崑、岡本喜八、こういう監

督の作品に出ている伊丹十三はいつも実にいい。いい俳優というものはその存在感にあるといわれているが、伊丹十三のは未来的な存在感とでもいうべき不思議な存在感で、私は常に幻惑され、これからもこの俳優にこだわり続けることだろう。

（「ヨコハマ映画祭」審査委員長）



助演女優賞 田 中 美 佐 子

## とてつもない女優の出現

鈴 村 た け し

この田中美佐子は、それは見事な出来栄であった。映画「丑三つの村」（田中登監督）は、世間から疎外され破滅に向かつて突き進んで行く主人公・犬丸継男（古尾谷雅人）が祖母のほか唯一心をかよわす若きヒロイン、赤木やすよを創出することによって成功したと云ってよい。やすよの存在が、この陰惨な作品にどれだけ救いの彩りを付加したことか……。

継男が湯舟にまきちらした鮮血を自らの身体にやすよがかかるシーンの凄絶な美しさ。そして、肺病に冒された継男と身体を重ねたやすよが喘ぎながら、

「かめへんよ……。こんなモン、減りゃせんモン……」

と激情をぶつけるシーンの厳肅な愛の証し。この時、田中美佐子のやすよは、一切な無駄なものを排除した女の精のようにみえた。

田中美佐子はこのやすよのうちに、女の愛と孤独、内面の錯綜と生理の不可思議、やさしさと弱さの翳り、生きることの哀れ、といった様々な要素をそれはもう完璧というに近い形で表現し得ていたと思う。

哀しいほどに美しかった。女の情念の迸りを無垢な清らかさで掬いあげ、純粹な魂の悲劇を鮮烈に演じきった。久しぶりに心のときめく、とてつもない女優が日本にもあらわれた、とボクは思った。

確かに、田中美佐子にはあでやかで清楚な花の香が漂う。ひとつの時代のシンボルとなりうる優美と艶麗。そして躍動する女の情感があり、それはつつましく気品のある美の呪縛を持ち、その胸のうち深くに隠された愁いの調べが透明にすみわたって、あたかもボクラの「心のふるさと」とでも云うべきものを喚起してくれるみたい

だ。

田中美佐子は今、女優として最も美しく、充実した時期にさしかかろうとしている。文句なしに若手ナンバーワン女優の資格充分だ。

あとは、本人の意欲次第。全身全霊、自己のすべてを賭けて女優をやって欲しいと、美佐子ファンを代表して希望しておく。

最優秀新人賞 原 田 知 世

知 世 ク ン 替 歌

ある日突然、ラベンダーの香りに誘われて、タイムトラベラーになった高校生・和子と原田知世。公開直後、記者が担当している映画のコラムに、少々気負って「新鮮ノスター誕生」なんて見出しをつけた。

大林・剣持コンビ。映画の完成度としては「転校生」の方が高かったと思うが、「時をかける少女」は、ひた

去年は、映画・テレビ・レコード・写真集と八面六臂の活躍で、それぞれにいい仕事をしたと思う。今年はこのステップに大いなる飛躍を心から期待している。ヨコハマ映画祭助演女優賞受賞、ダテじゃないところを見せて下さい、美佐子さん。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

服 部 宏

すら新人・知世クンの映画である。コラムに使ったスタイルは、彼女がまぶしい二の腕を見せて弓を引いているカット。絵ときは「初々しい15歳、83年新人賞の金的を射ることができるか」と。これまた少女、青くさい。ま、記者の一票も加わって、わがヨコハマ映画祭の新人賞をとったのだから、まずは幸先よろしい。オメデトウノ

知世クンという新鮮な果実は、まだ固いが、ひたむきで、たおやか。りりしくて（これは本来、男性にたてまつられてきた表現だろうが）どこか知的なひらめきがある。透明でありながら、不思議な存在感。

映画デビュー作だが、いわゆるタレント映画のように笑顔と愛きょういっぱいには撮られていない。それを十分承知の大林監督、カーテンコール風にラストを締め、主題歌を歌わせながら、彼女の笑顔と躍動をたっぷり見せる演出も、ニクかった。

どちらかと言えば、硬質なイメージ。それは、ふくらみを待つツボミという、いわば年齢相応の関係からくるものだけではない。ぼっちゃり型の先輩・薬師丸ひろ子と比べても、ずっと鋭角的なムード。きりっとした口元、すずしい目。下あごのあたりの、ややきつい輪郭。それらが、秘めた「意志」を感じさせる。総女性化、ブリッ子まんえんの時代にあって、知世クンの顔はどこか覚めており、意志的で頼もしい。アイドルが「時代の子」なら、彼女は無言のうちに、時代や状況を逆照射している、などと書けばオーバーか。

知世クンの歌は、決してうまくない。声を張らず、感情の起伏を仰えて、無機質。その一種、媚（こび）のなさもまた、深くてすがすがしい。彼女の延長線上に、男

を挑発し女の自立を歌に仕掛けた山口百恵を重ね合わせたりしている、今日このごろ……。

（神奈川新聞文化部）



最優秀新人賞 宇沙美 ゆかり

# シーローの誕生

足立喜之

井筒和幸監督の「みゆき」は、若松みゆき演じる宇沙美ゆかりと、鹿島みゆき演じる三田寛子のバランスが全ての様な映画である。

いや、それがこの映画の魅力であって、若松真人を中心にしてこの左右対称が実に微妙なシンメトリーを形成し、さらにその図式が、この様な一人称的物語とまるでシーソーの如く、いいバランスを保つんだなあ……これが。

だから、それだけ二人のみゆきが魅力的で、真人じゃないけど「俺はいいたい、どっちのみゆきが好きなんだ!?」なんて真剣な愚問を叫んでしまうんだけど、彼女等は確立され位置付けられた表裏一体化の姿であって、交わる事も交わらうとする事も許されないのだ。

何故ならば、寛子ちゃんはおくまで京都出身のイー

とこの、イーとこのお嬢さんやし、ゆかりくんはおくまでも沖繩の明るい、明るいバンビくん……そうあって欲しいのである。

観客を主人公に透過させてしまう映画、これは久しぶりだな。

健さんや旭みたいなヒーロー連中ならハナシはわかるけどネ、真人に透過するなんて……。 (アーア、等身大のヒーローよ！)

井筒監督の「ガキ帝国」に勝るとも劣らないこの作品に出演出来た事に感謝するのですぞ、二人のみゆきくん……と思ったんだけど、これは明らかに僕のマチガイでした。

寛子ちゃんとゆかりくんに出演してもらった事に感謝しなさい、井筒サン!!

特に、二人の話し方のテンポが、このシーソーに重みを加わえているんじゃないかな？

寛子ちゃんのグズグズ話す可愛らしさと、ゆかりくんの舌足らずながらスバズバ話す可愛らしさのコントラストが実に刺激的で、これは正に中心軸なんか、二人の遠心力でどこかに飛んでいってしまうものね。

世界初の新しいアイドル映画の誕生であろうか。ちがう、ちがう、アイドルなんて二人は人形じゃない。ヒーローなんて、彼が掟という映画があるならば、これはヒーロー、彼女が掟の映画なのだ。ヒロインなんて甘いもんじゃないもん。こりゃ。

寛子ちゃんが求める眼ならば、ゆかりくんは訴える眼をしている。

ただ一ヶ所だけ大事な大事な共通点があるんです。寛子ちゃんの泣き顔が可愛いければ、ゆかりくんも風邪の時の熱っぽい顔が、また可愛いんだな。女は弱い、だから守ってあげなければいけない……。

さて、「どっちのみゆきが好きなんだ?!」

男ってバカだなあ、そして俺はもっとバカなんだなあ。

PS ゆかりくん、新人賞おめでと。

自主製作映画賞 「竜二」

その血のあたたかさ

田中千世子

「竜二」には詩がある。ピクピク動く心臓がある。その心臓から送り出される血はあたたかだ。こんな映画を

見たのは、実際何年ぶりだろう。

ヨコハマ映画祭のベスト・テンで「竜二」は第三位、



特別大賞 前田陽一

前田陽一喜劇万才!

そのアナキーな魅力について

秋本鉄次

ここ数年、秋から冬にかけての季節になると、松竹のお正月映画が気になって仕方がない。といっても、「寅さん」のマドンナは今回は誰!? ということではない。

前田陽一映画は今年も同時上映されるだろうか!?

ほとんどこの一点である。80年正月、「神様のくれた赤ん坊」、81年正月「土佐の一本釣り」と順調に来たが、翌82年はアニメにとって代られ前田映画はナシ。しかし83年は「次郎長青春篇・つっぱり清水港」で、「お正月映画の顔」にカムバック。続いて84年正月も「喜劇・家族同盟」と連チャン。嬉しいね。

そう、もう20年にもなるのである。前田陽一喜劇を見せて貰って。初めての前田映画は中学生か高校の初めの頃だったろうか、「ちんころ海女っ子」だった。もちろん、この時はお目あては前田陽一サンではなく、主演の

中村晃子サンの姿態だった。これに加えて、「にっぽんばらだいす」などの「風俗喜劇」が初期作品群、中期となって「喜劇・あゝ軍歌」「喜劇・男の子守唄」などの「焼跡闇市回帰願望」ともいう一連の重喜劇、続いて「喜劇・日本列島震度〇」（競輪）、「虹をわたって」（競艇）、「喜劇・三億円をつかまえる」（競馬）と公営ギャンブルを背景にした「三部作（とギャンブル好きなボクは、このへんの作品に特に愛着があるせいかな、勝手にこう呼んでしまう）」、そして、ここんところのバイタリティあふれる一連の作品群——と壮観の一語にまことによどみない。

そのよどみなさは、ポリシィの一貫性によるのだ。つまり、「整備されすぎた体制や社会に対する破壊願望」「その未整備時代に輝きがいやます青春回帰」「身内の

慣れ合いより、他人の緊張感（「寅さん」の併映だとのコントラストがよくわかる）" e t c.

つまり総体としての前田陽一映画の魅力をひと言で無理矢理言ってしまうえば、「アナーキズム」ということじやないだろうか。

— 本当は、前田陽一映画を年に3本も4本も見たいのだが、これまで年1本平均であり、現在の映画状況では、

正直言って今後も年1本なのかな、と暗い予測をしてしまふ。年に1度、「天の川」の心境である。しかし、それ以下になっては、この世は闇である。日本映画の一大損失である。

— といってるそばから、次の前田陽一映画が待ちどおしくなってきた！

（映画評論家）

特別大賞 角川春樹

映画を爆発させる人

小野善太郎

映画が爆発するものであることを知ってしまった時から、人は映画から離れられなくなる。それを映画の魅力とか、時には魔力とかいうわけだ。

さて、ここにも2通りの人がいる。いわゆる映画ファンは、個人的にその爆発を受けとめることに快感がある。それが、部屋の窓やテレビ画面よりは大きくても所詮世

の中ほどではないスクリーンに映される、せいぜいが2時間の爆発であるにしても。もちろんこれは個人的にはかなりの爆発ではある。そして今も全国のどこかのスクリーンの前では数限りない個人的な爆発が起こってはいらずだ。ところが、それはニュースにはなりえない。その程度の力は、いつだって映画は持っているのだから。

映画の眞の爆発とはそういうことを言うのではない。それは、単にある個人の内面での爆発にとどまるものではなく、眼にはっきりと動きの見えるダイナミックな社会現象としてあらわれる。小さくても輝いていれればいいのだから、それだけでは映画は結局、下宿の、アパートの、マイホームの、茶の間のテレビに収束してしまう。それは、はじけることはあっても、爆発はしない。爆発してこそ映画は文化たりうるのではないか。そして再び大衆のものとなるのではないか。このように明解に考える人もいる。

とはいえ、映画は簡単には爆発してくれない。作品単体の持つパワーだけではもちろんのこと、金の力だけでも、スターの力だけでも、足りない。もっと有機的な何かが必要なのだ。それが何であるか、はっきりとつかめる人は少ない。そしてそこから現実化していく人はもっと少ない。

だから映画が爆発すればニュースになる。そしてある映画群が極立って爆発し続けるから、角川春樹氏はいつでも話題の人なのである。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

審査員特別賞 金子正次

偉大な戦士

塩田時敏

自主製作映画賞をも受賞した「竜二」の配給が決まる以前、逸早く「竜二」の二文字を活字にする事に始まり、劇場用のパンフレットで「金子正次」の四文字を写植に

してしめるまで、数度にわたってこの映画を取り上げた時の筆先は、予期せぬところから、いきなり出現して来た。たきらめく才能に、スターに、興奮のあまり軽やかで、

なめらかだった。

だが、この原稿の筆先は、これまた予期せぬ金子正次の突然の死に、ただひたすら重い。我々が語り次ぐ伝説を持つべく、常々、同世代の（もしくは同時代の）若い、新しい才能とその出現を積極的に支持し、前世代の遺物を打倒することを、もって批評の旨とする僕にしてみれば、金子正次の死は口惜しくてならない。

原田芳雄でもない、松田優作とも違う、しかし正統的に彼等の跡目をつくべき金子正次のキャラクターの価値の高さは、先刻御存知のとうりで、「竜二」を視た者ならば誰しも、その白い歯と共に忘れることは出来まい。

いったい金子正次は、「竜二」という映画で遺書を残した男なのだろうか。そうではないだろう。「竜二」自体はやくざ映画へのレクイエムだったが、決して金子自身への鎮魂曲ではない。彼の話で痛く気に入っているのは、「映画作りにハンコはいらねえ」という言葉である。製作、配給の体制が根底から様変りした映画界に、まさに挑戦状を叩きつけながら、戦いのさ中に文字どうり激烈な戦死をとげたのである。

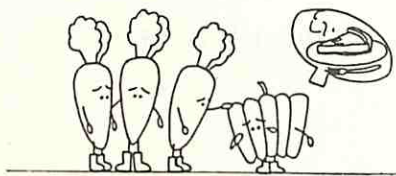
またふっとさ、映画よりも興味あることが出来て映画やめちゃうかもしれないけどさ、塩田くんね、「ちょうちん」と「盆踊り」の二本を映画にするまでは絶対にや

めないよ、と。

我々は、偉大な戦士・金子正次に、心よりの思いを込めて審査員特別賞を贈るが、贈られた金子にしてみても、浮かぶに浮かばれまい。「竜二」がだめなら、二作目、三作目で主演男優賞、脚本賞をこそとって欲しかったのだ。とる可能性を秘めていたのだ。

ひととうりの仕事を成した人なら、まだいい。彼こそは本当にこれからの才能だった。惜しい人を失くしたとは、死者に対する常とう句だが、この言葉は金子正次の死に対してこそ用いられるべきものだろう。他人は知らず、僕の中では、ここ当分の間この言葉は、金子正次への「永久欠句」としたい。

(シネマ・フリーライター)



## 第 5 回 ヨコハマ映画祭

### ◎ 1983 年度 日本映画ベストテン◎

第 1 位	家族ゲーム	森田芳光
第 2 位	時をかける少女	大林宣彦
第 3 位	竜 二	川島透
第 4 位	俺たちのウェディング	根岸吉太郎
第 5 位	魚影の群れ	相米慎二
第 6 位	BLOW THE NIGHT! 夜をぶっとばせ	曾根中生
第 7 位	十階のモスキート	崔洋一
第 8 位	細 雪	市川崑
第 9 位	ダブルベッド	藤田敏八
第 10 位	戦場のメリークリスマス	大島渚
(次点)	ジョンベン・ライダー	相米慎二

※ 1982年12月11日より1983年12月10日までに一般公開された日本映画が対象です。

各選考委員のベストテンの1位を10点，以下10位1点までを集計した結果です。

# 第五回 ヨコハマ映画祭

## '83年度 日本映画ベストテン

### ＜選考委員＞

次之明 生彦子 雄朗也 郎且子 満人 人敏子 昭し 弘子 美子 昭宏 夫男 光夫 晃明 晃  
 鉄喜 博澄 邦陽 宏敏 克善 正悦 秋充 久時 洋義 千直 裕正 真真 利和 俊  
 本立 田部 飼海 高形 田野子 川見 原東 田野 木村 島中 崎田 村部 田村 野村 口海  
 秋足 池井 鶯内 大尾 小小 金岸 北北 桑古 塩柴 鈴鈴 高田 塚津 野服 林藤 牧町 松山 弘  
 (50音順)

### 秋 本 鉄 次

ったその「竜二」は、私にとって掛け値なしに「座右の映画」となるだろう。

ピンク、ロマンポルノはイマイチかと思われたが、秋公開の「連続暴姦」は秀逸なアイデアのサスペンスとしてお奨めしたい。

①竜二 ②十階のモスキート ③陽暉楼 ④家族ゲーム  
 ⑤人生劇場 ⑥東京裁判 ⑦連続暴姦 ⑧夜をぶっとばせ  
 ⑨逃がれの街 ⑩つっぱり清水港

見よ、この邦画シーンの活況ぶりを。もう10本ぐらい選びたい気分だがこの10本に代表させて貰った。何とんでも痛恨なのは「竜二」の金子正次兄の突然の死だ。ファースト・ピクチュアにしてラスト・ピクチュアとな

順不同であと10本選ぶとしたら「天城越え」「シヨンベン・ライダー」「みゆき」「時代屋の女房」「俺っちのウェディング」「榎山節考」「細雪」「ダブルベッド」「迷走地図」「丑三つの村」というところか。

足立喜之

- ①縄と乳房 ②みゆき ③俺っちのウェディング ④東京裁判 ⑤時代屋の女房 ⑥家族ゲーム ⑦戦場のメリークリスマス ⑧赤いスキャンダル・情事 ⑨天城越え ⑩父と子

それぞれのスクリーンの中で、力強く呼吸し続けるヒロイン達よ!

あなたがたは、女である事で美しく、女である事で悲しい。

あなたがたは、異性である僕に喜びと失望を与えてくれた。そんなコントラストが、生きる道だと信じ続ける僕は、いつかスクリーンで出会ったあなたと、別離と邂逅の為のウェディング・ベルを鳴らしたのだった。

(会社員)

- ①俺っちのウェディング ②ションベン・ライダー ③家族ゲーム ④夜をぶっとばせ ⑤十階のモスキート ⑥時代屋の女房 ⑦もどり川 ⑧丑三つの村 ⑨逃がれの街 ⑩うる星やつら
- 「俺っちのウェディング」はペンギニストの聖典となる稀代の傑作。かつて同種の映画はなかった。「時をかける少女」よりも「探偵物語」が、「檀山節考」よりも「汚れた英雄」が好ましい。

(教員)

井ノ部 澄生

- ①時をかける少女 ②檀山節考 ③家族ゲーム ④ふるさと ⑤天城越え ⑥伊賀野カバ丸 ⑦オキナワの少年 ⑧竜二 ⑨ションベン・ライダー ⑩夜明けのランナー
- 対象作品は50本しかみていませんでした。うちポルノは3本だけ、自主製作は1本もみていません。いまの日本映画の全体像からするとずい分遠いところにいる気がします。そんな中で邦画ラインアップの中の作品群と、

新人監督たちの熱い思いにささやかながら敬意を表したいと思います。

(自営業)

鶴 飼 邦 彦

①夜をぶっとばせ ②ダブルベッド ③戦場のメリークリスマス ④家族ゲーム ⑤もどり川 ⑥俺っちのウェディング ⑦みゆき ⑧オキナワの少年 ⑨十階のモスキート ⑩時をかける少女  
手前ミソになるが、「夜をぶっとばせ」がやはり今までになかったスタイルの映画として去年の日本映画のなかで、ひとつのエポックを作っていると思われるので、ファンの立場として一位に入れました。

にもかかわらず不作の年だったが、「ダブルベッド」がシヤレた大人の映画として楽しめる作品になっていました。あの話題作「伊賀野カバ丸」が締切までにみれなかったのが心残りではありません。

(映画製作者)

内 海 陽 子

①シヨンベン・ライダー ②魚影の群れ ③家族ゲーム ④細雪 ⑤つっぱり清水港 ⑥時をかける少女 ⑦丑三つの村 ⑧夜をぶっとばせ ⑨陽暉楼 ⑩探偵物語  
今年「シヨンベン・ライダー」で明け、「魚影の群れ」で暮れた、幸福な一年だった。相米慎二、万歳、とこれだけ書けば、もういうべきこともない。あ、そうだ、「家族ゲーム」と「探偵物語」の2本で健在を示した松田優作も印象的だったなあ。もう1回特別大賞をあげたい。森田芳光監督の、日本映画そのもののイメージ・アップに貢献した力量もすばらしい。この調子で来年もう一人といろんなことをやってほしいな。みなさん、期待してます。

(映画評論家)

大 高 宏 雄

①夜をぶっとばせ ②もどり川 ③魚影の群れ ④時をかける少女 ⑤巨根伝説 ⑥竜二 ⑦シヨンベン・ライダー ⑧幻魔大戦 ⑨女子大生・教師の眼の前で ⑩若

## 妻人質拷問

「夜をぶっとばせ」で、奈美江の妹が車ごと海から上がったこないシーン。そして、奈美江が新宿の雑踏に消えてゆくラスト。この両クライマックスに象徴されるように、曾根中生は非日常から日常、あるいは日常から非日常への揺れを通して映画表現の可能性と不可能性をまさぐる。奈美江の妹の死で想起するのは、「赤い暴行」の紗貴めぐみの唐突の死であり、可憐な少女の死に曾根は、名づけようのない憤懣を託しているかのようである。長谷川和彦、柳町光男が撮れず、水谷俊之は「女子大生」の監督と「ときめきに死す」の助監督でお茶を濁した。森田芳光の「家族ゲーム」は、ラストに向うほどに露わになる映像の安定感故にベストテン圏外へ。とにかく84年は、水谷のにつかつ初登場作品をはじめとして、長谷川、柳町の新作が見れるはずであり、俺自身の憤懣の根が変貌する年でもある。

(映画記者)

## 尾形敏朗

①家族ゲーム ②戦場のメリークリスマス ③陽暉楼

④十階のモスキート ⑤真夜中のボクサー ⑥みゆき  
⑦実録痴漢教師 ⑧ダブルベッド ⑨伊賀野カバ丸  
⑩細雪

いろいろな人が、いろいろな方法で映画製作に挑んで、近年になく邦画界は充実していたと思う。一時期に比べて、かなり自由に映画が撮れる時代になってはいるけれど、金を取って見せることの厳しさを自覚していない人が、まだまだ多い。その意味から僕は、興行的な問題はあっても、作品がきちんと商業映画の基本を踏んでいて、なおも映画的魅力にあふれている十本を選んでみたつもりである。

(映画評論家)

## 小田 克也

①家族ゲーム ②ダブルベッド ③オキナワの少年  
④竜二 ⑤探偵物語 ⑥草迷宮 ⑦丑三つの村 ⑧十階  
のモスキート ⑨実録ザ・素子 ⑩戦場のメリークリスマス  
マス

最近、観たあと暗澹とした気分させる映画は敬遠したくなる傾向が強くなった。日本映画は大作にそれが

多い。なるべく軽く、そしてコミカルなものがよろしい。テーマは深刻でも、語り口は明快に――。

上位3本はそのトータルな観点から選んだ。アニメは「クラッシュ・ジョー」をぜひ入れたかった。「細雪」はいいが、リメイクなのでオロした。「居酒屋兆治」「白蛇抄」「海ゆかば」は未見。次点は「みゆき」です。

(映画評論家)

### 小野 善太郎

①SEARCH ②竜二 ③夜をぶっとばせ ④伊賀野カバ丸 ⑤クラッシュ・ジョー ⑥プロ野球を10倍楽しく見る方法 ⑦家族ゲーム ⑧時をかける少女 ⑨ゴルゴ13 ⑩十階のモスキート  
映画が丸ごと人生にかかわるといったような、映画とのかかわり合い方が薄れてきたこの頃ですが、マンション探しをした経験とダブって「家族ゲーム」の変型2LDKのようなものが、やけに部分的に気になった83年でした。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

### 金子 正 且

①家族ゲーム ②竜二 ③ふるさと ④魚影の群れ  
⑤戦場のメリークリスマス ⑥時をかける少女 ⑦天城越え ⑧ダブルベッド ⑨縄と乳房 ⑩檀山節考  
4位までは私の確信、あとの順位は迷いに迷った末の結果である。「南極物語」「オキナワの少年」がはみ出してしまった。「竜二」は金子正次の死が実に残念だ。33才の若さでフェニックスの如く翔び去った。

(「ヨコハマ映画祭」審査委員長)

### 岸 悦 子

①家族ゲーム ②時代屋の女房 ③竜二 ④時をかける少女 ⑤十階のモスキート ⑥もどり川 ⑦俺っちのウエディング ⑧天城越え ⑨魚影の群れ ⑩3年目の浮気

劇場で観た記憶はほとんどなくて、子供の頃、TVで観たかな?という程度だったけれど、それでも「日活映画」というのは、昔から好きでした。それが、あらためて「紅の拳銃」「霧笛が俺を呼んでいる」で赤木圭一郎

に恋をし、「東京流れ者」「無頼より・大幹部」で渡哲也に惚れました。この出会いが、83年、私にとっての「映画」でいちばん大きなエピソードでした。おかげで映画がますますオモシロクなりました。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

北川 れい子

- ①ダブルベッド ②シヨンベン・ライダー ③竜二  
④縄と乳房 ⑤家族ゲーム ⑥夜をぶっとばせ ⑦己  
⑧暗室 ⑨みゆき ⑩細雪

一見、小粒な作品ばかりのわがベスト・テンになってしまったが、やはり小さくとも作品世界の充実度は、そこいらの大作、話題作など足元にも及ばない。「戦場のメリークリスマス」「楢山節考」、あるいは「魚影の群れ」などは、なるほど見応えのある力作だが、スクリーンとそれに向う自分との間になんらの共通語も見つからず、終始、彼岸の火事でもながめている気分だった。

(映画評論家)

北見秋満

- ①家族ゲーム ②つっぱり清水港 ③細雪 ④もどり川  
⑤シヨンベン・ライダー ⑥ダブルベッド ⑦天城越え  
⑧戦場のメリークリスマス ⑨俺っちのウェディング  
⑩セーラー服百合族2  
充実の一年、日本映画をたっぷり堪能できた年でした。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

桑原充人

- ①竜二 ②家族ゲーム ③ダブルベッド ④夜をぶっとばせ  
⑤南極物語 ⑥戦場のメリークリスマス ⑦時をかける少女  
⑧俺っちのウェディング ⑨悪魔の人質  
⑩楢山節考

きんし町・楽天地ビルオープン、結婚控を控えて、数年来にない本数の低さ……。合間に観た作品を並べてみました。

金子正次(楽天地「南極物語」試写会etcで飲んだり)の突然の死……。

今までの人生で、メモライズな1年だったと思います。

(東京楽天地・宣伝部)

古 東 久 人

①時をかける少女 ②家族ゲーム ③十階のモスキート  
④みゆき ⑤竜二 ⑥逃がれの街 ⑦人生劇場 ⑧天城  
越え ⑨伊賀野カバ丸 ⑩戦場のメリークリスマス  
ドキュメンタリーということでベストテンには入れな  
かったが、「光と風のきずな」も印象に残っている。目  
の不自由な女子大生がスペイン留学を果たす話であるが、  
押しつけがましくなく感動的に仕上がっているのが素晴  
しい。

にっかつ作品で見逃したのが多いのは心のこり。

(会社員)

塩 田 時 敏

- ①家族ゲーム ②時をかける少女 ③十階のモスキート  
④魚影の群れ ⑤竜二 ⑥夜をぶっとばせ ⑦もどり川  
⑧戦場のメリークリスマス ⑨連続暴姦 ⑩ピンクカッ

ト・太く愛して深く愛して

実際、どう組み替えてみても、ベストテンより落ちこ  
ぼれてしまう作品がまだ10本。撮るべき手が2本ずつ  
作品を発表していることが邦画の完璧な蘇りを証明して  
いる。

こうなりゃ、嬉しいヤケクソ、森田映画を上下に、活  
きのいいところを8本、間にはさみこむしかない。83年  
は森田の時代だったのだから。

この中で、第9位の「連続暴姦」をご存知の向きは少  
ないと思われるので、一言触れておくと、今、ピンク映  
画でミステリー演出に抜群のセンスを発揮している、27  
才の新鋭・滝田洋二郎の傑作だ。フライアン・デ・バル  
マも脱帽しかねないそのパワーは、脚本の高木功、撮影  
の佐々木原保志ともども要注目。行く行くは一般映画に  
引張り出したい萌芽である。

(フリーライター)

柴 野 洋 子

- ①時をかける少女 ②家族ゲーム ③つっぱり清水港  
④俺っちのウェディング ⑤魚影の群れ ⑥細雪 ⑦天

城越え ⑧ダブルベッド ⑨みゆき ⑩戦場のメリークリスマス

心ときめくステキな映画がいっぱいあった年で、素晴らしい映画を沢山プレゼントして下さったみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

思い出だけで胸の熱くなるような映画を何本も持てたこと、嬉しく思っています。

(会社員)

### 鈴木 義 昭

①戦場のメリークリスマス ②竜二 ③白蛇抄 ④幻魔大戦 ⑤天城越え ⑥十階のモスキート ⑦時をかける少女 ⑧縄と乳房 ⑨家族ゲーム ⑩悪女かまきり  
突然の金子正次の死に、人間の生死を考えさせられたのはボクだけではあるまい……。

他は、もう「戦メリ」さえあればということなしという一年だった。大島渚と、ついに出会ったと思った。時代と映画に対する問題意識が、こども自分とフィットするとは思ってもいなかった。ナギサ、バ・ン・ザ・イノ

(フリーライター)

### 鈴木 村 たけし

①家族ゲーム ②伊賀野カバ丸 ③細雪 ④つっぱり清水港 ⑤俺っちのウェディング ⑥時をかける少女 ⑦3年目の浮気 ⑧もどり川 ⑨天城越え ⑩丑三つの村

下降一方だった観客動員にもハドメがかかると同時に、質的にも若手・中堅・ベテランの各監督連の歯車がよく噛み合って粒揃いの秀作が続々と輩出し、映画ファンに豊年満作のよい年だったように思います。

そんな中で、ひとときわ突出した「家族ゲーム」の映画史上空前の無気味なパワーと、「伊賀野カバ丸」の圧倒的な映画の活力に満ちたエネルギーには完全に脱帽でした、ハイ。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

### 高 島 弘

①竜二 ②家族ゲーム ③夜をぶっとばせ ④もどり川 ⑤俺っちのウェディング ⑥十階のモスキート ⑦時をかける少女 ⑧魚影の群れ ⑨みゆき ⑩暗室

(「夢工場」)

田 中 千世子

- ① もどり川 ② 家族ゲーム ③ 竜二 ④ セーラー服百合族
- ⑤ 戦場のメリークリスマス ⑥ 俺っちのウェディング ⑦ 夜をぶっとばせ ⑧ 細雪 ⑨ 魚影の群れ ⑩ 廃市

自己破滅の美学をジャラジャラもてあそんだ結果、自らそれに殉じてしまう男を描いた「もどり川」の強烈な私性<sup>わたくしせい</sup>に惹かれる。そうした私性をせせら笑う「家族ゲーム」も、また同時に面白いと思う。

(映画評論家)

塚 崎 直 美

- ① 魚影の群れ ② 時をかける少女 ③ 家族ゲーム ④ 探偵物語
- ⑤ 時代屋の女房 ⑥ 細雪 ⑦ みゆき ⑧ 陽暉楼 ⑨ 人生劇場 ⑩ 俺っちのウェディング

最近の森田芳光の自信、緒形拳のシブいイイ男っぷり、夏目雅子の美しさはいい。伊丹十三の怪演には目を見はるものがある。というより実にオカシイ。健さんもあんなに我慢ばかりしないであーゆーふうに発散すれば、煮

こみの心配なんかしなくてもすむのにネッ！ ところで、私の知りあいの商社マンは「時かけ」に狂ってしまい、それ以来セックスを感じさせる女はダメだと放言するやら、仕事を投げだして尾道へ旅立つやらで大騒ぎ。罪つくりな映画だ。なお、特別大賞は追悼の意味もこめて。

(雑誌編集者)

津 田 裕 子

- ① 俺っちのウェディング ② 細雪 ③ 家族ゲーム ④ 魚影の群れ
- ⑤ つっぱり清水港 ⑥ 陽暉楼 ⑦ 夜をぶっとばせ ⑧ 女帝 ⑨ 嵐を呼ぶ男 ⑩ 人生劇場

(会社員)

野 村 正 昭

- ① ダブルベッド ② 細雪 ③ ションベン・ライダー
- ④ 魚影の群れ ⑤ 時をかける少女 ⑥ 家族ゲーム ⑦ 十階のモスキート
- ⑧ みゆき ⑨ はだしのゲン ⑩ 戦場のメリークリスマス

1位から10位までのどれがベストワンになってもおかしくはなく、胃が痛くなるほど悩みました。この順序はホンのはずみです。83年の日本映画は本当に面白かった。「廃市」「陽暉楼」「もどり川」「激動の昭和史、東京裁判」「暗室」「幻魔大戦」「春画」「ブルーレイン大阪」「BLOW・THE・NIGHT夜をぶっとばせ」「お姉さんの太股」などがはみ出してしまったのが残念です。映画で遺書を残して死んだ男の物語「竜二」の金子正次の死には衝撃を受けました。「竜二」について書きたいことは山ほどありますが、あえて外します。1年間という祭りの区切りの中で、区切られるものではなく、映画と人とのひとつの関わり方として、ずっと噛みしめたいと思います。故人の冥福を祈って、ひょっとして、ありうべきはずだった未来への可能性の夢として、花輪代りに新人賞のみを金子正次に捧げます。

(映画評論家)

服部 宏

- ①家族ゲーム ②丑三つの村 ③戦場のメリークリスマス  
④榎山節考 ⑤東京裁判 ⑥十階のモスキート

⑦つっぱり清水港 ⑧三年目の浮気 ⑨もどり川 ⑩オキナワの少年

旧来の映画文法に、大胆に挑んだ「家族ゲーム」、映画が闇で見る悪夢であることの堂々たるメッセージ「丑三つの村」。ベテランも、いい仕事をしてくれた(3/5位)。新人では崔洋一のパワー、後半の腰くだけが惜しい新城卓に期待。中原俊は、今や前田陽一に続くプログラムピクチャーのエースです。未見「竜二」「小津安二郎伝」が気がかりのまま……。柳町光男の名がないのも寂しい。

(神奈川新聞文化部)

林 真木夫

- ①家族ゲーム ②四畳半色の濡衣 ③パタリロノ ④時をかける少女 ⑤俺っちのウェディング ⑥十階のモスキート ⑦のぞき ⑧3年目の浮気 ⑨セーラー服百合格 ⑩もどり川

83年は日本映画が新しい時代を迎えた年として記録に残ることになるだろう。「家族ゲーム」出現の年である、と大ハシヤギしたところで、ボクの初夢は今年見たい映

画のことである。石井聰互監督の新作、角川映画の新たな展開、そして梅沢富美男の主演女優賞。

83年の洋画では「ハイロード」のベス・アームストロングに拍手、そして「ローリングストーンズ」のキースとミックは別格。

映画はオモシロイ。

(「ヨコハマ映画祭」実行委)

藤田真男

- ① ションベン・ライダー ② 家族ゲーム ③ うる星やつら・オンリーユー ④ 魚影の群れ ⑤ 時代屋の女房 ⑥ DRY RUN ⑦ 以下なし

ほんとに面白いと思った映画だけ選んだら6本しかなかった。主演男女優も、これだと思う人がいなかった。

藤竜也は主演なのだろうが、「うる星やつら」はTVでも映画のパロディやムチャクチャなことをやっているスタッフの楽しそうな顔が見えるようで、もっと高く評価されるべき作品。これと「ションベン・ライダー」の2本立てが最高でした。よってキティに特別大賞。「DRY RUN」は富士8ミリコンテストのグランプリ。

(映画評論家)

牧村利光

- ① ダブルベッド ② 3年目の浮気 ③ つっぱり清水港 ④ 俺たちのウェディング ⑤ 家族ゲーム ⑥ ションベン・ライダー ⑦ 痴漢電車・百恵のお尻 ⑧ 夜をぶっとばせ ⑨ 時をかける少女 ⑩ うる星やつら・オンリーユー 「ダブルベッド」「3年目の浮気」「家族ゲーム」：といった映画に出会くと、「映画」は「時代」は確実に変わりつつあるのだという想いが皮膚感覚として伝わってきて、スリリングで面白かった。その一方で「つっぱり清水港」の前田陽一監督の変らぬ心意気がうれしい。

(店員)

町野和夫

- ① 家族ゲーム ② 時をかける少女 ③ 竜二 ④ 俺たちのウェディング ⑤ 細雪 ⑥ セーラー服百合族 ⑦ 縄と乳房 ⑧ タクシードライバー・白昼の陶酔 ⑨ セーラー服

百合族 2 ⑩ 神田川淫乱戦争

セーラー服百合族 1・2 の那須、そして鴨田好史の一連の作品などが今年の日本映画の収穫だと思えます。日本映画そのものが、角川映画その他のメジャーな部分に代表される形で進んでいます。につかつ、ピンクそして自主上映映画など陽の当たらない作品の中に心をゆるがす作品が多いことにおどろきを感じます。日本映画のこれからの行方は、こうしたマイナーな一連の作品群が大きな力となり展開してゆくような思いがしてなりません。

(会社員)

松村 晃

① 居酒屋兆治 ② 時をかける少女 ③ 天城越え ④ 時代の女房 ⑤ 魚影の群れ ⑥ お姉さんの太股 ⑦ シング  
ルガール ⑧ 家族ゲーム ⑨ 迷走地図 ⑩ 狐色

久々に無職となって、朝はセッセとラブレター書き、昼間はノコノコ映画館通い、夜はユッタリ読書の日々。朝の奮闘篇が実を結び何とか「うちのやっかいもん」と呼べそうな女性が見つかり、昼間は、やたら上映時間が長くなった映画とのガマン大会。夜、北方謙三のキラリ

輝く女性たちに涙！ 「逃がれの街」は一番の駄作じゃ、映画化するなら「檻」が一番！ 夏目雅子は存在するだけで光っていた。

(「高倉健ファン・クラブ」会長)

山口 俊 明

① 居酒屋兆治 ② 暗室 ③ 家族ゲーム ④ 竜二 ⑤ 魚影の群れ ⑥ 探偵物語 ⑦ 天城越え ⑧ 白蛇抄 ⑨ 男はつらいよ・旅と女と寅次郎 ⑩ 檀山節考

映画のおもしろさにも色々あり、カメラ・音楽のすばらしいものや、出演者が魅力的で思わずひかれたもの、本がよくて話がおもしろく時間のたつのを忘れたもの等々あるが、今年の作品はどれも演出のすばらしさ、話のはこびのうまさで観せてくれた。ここに並べた十本もそれぞれ出演者がよかったのやカメラがすばらしかったもの等があるが、監督の演出が何んと言っても魅力で、私の83年の映画となった。

(会社員)

弘原海 晃

①細雪 ②時代屋の女房 ③居酒屋兆治 ④迷走地図  
⑤家族ゲーム ⑥俺っちのウェディング ⑦魚影の群れ  
⑧セーラー服百合族 ⑨丑三つの村 ⑩夜をぶっとばせ  
映画はだんだん面白くなって来ました。でも映画を見る人はなんとなく先細りのようです。がんばらなくちゃ、がんばらなくちゃ、と思いがらまた一年たつて映画まつりの季節です。映画をいっぱい見て、そのうちよい時代が来るのを一生けんめい待っています。

(京一会館支配人)

〔締切後到着分〕

締切に間に合わなかった分が、2通ありました。集計には含められませんでした。以下掲載致します。

土田 啓三

①家族ゲーム ②竜二 ③天城越え ④東京裁判 ⑤シンベン・ライダー ⑥伊賀野カバ丸 ⑦探偵物語

⑧時をかける少女 ⑨女帝 ⑩つっぱり清水港  
年々見る本数が減ってきており、今年も「俺っちのウェディング」、「魚影の群れ」、「十階のモスキート」等を見逃してしまった。遅過ぎた新人、三村晴彦の素晴らしいデビュー作に出会えたのがせめてもの幸い。(三村+加藤泰の傑作「みな殺しの靈歌」からもう15年！)  
鈴木則文は純粹娯楽活劇をまともに撮れる最後のカッドウヤではないだろうか。「時をかける少女」は、その素晴らしいフィナーレに一点。

(会社員)

斎 春雄

①暗室 ②細雪 ③竜二 ④人生劇場 ⑤陽暉楼 ⑥シンベン・ライダー ⑦男はつらいよ・旅と女と寅次郎 ⑧家族ゲーム ⑨戦場のメリークリスマス ⑩十階のモスキート


今年も一年、楽しく映画を観る事ができました。ベスト10も私情を込めて気持ち良く選んだつもり。平和な時代、自らの健康に感謝しつつ。

(東宝・ビデオ作者)

★ 最優秀新人賞（2名連記）

原 田 知 世	10 票
宇沙美 ゆかり	7 票
金 子 正 次	5 票
河 合 美智子	5 票
高 田 奈美江	4 票
岡 本 かおり	3 票
時 任 三 郎	3 票
宮 川 一郎太	3 票

★ 自主製作映画賞

「 竜 二 」	5 票
「  じかけのオレンジ 」	3 票
「 S P H 」	2 票

★ 特別大賞

角 川 春 樹	6 票
前 田 陽 一	5 票
金 子 正 次	5 票
小 林 正 樹	4 票

## 個人賞得票数

### ★監督賞

森田芳光	15票
相米慎二	4票
市川崑	2票
大島渚	2票
大林宣彦	2票
曾根中生	2票
藤田敏八	2票

### ★新人監督賞

崔洋一	12票
三村晴彦	8票
川島透	4票

### ★脚本賞

森田芳光	7票
荒井晴彦	5票
鈴木明夫 (金子正次)	4票
剣持亘	4票

### ★技術賞

前田米造(撮影)	7票
羽方義昌(撮影)	4票
坂本龍一(音楽)	3票

### ★主演男優賞

松田優作	8票
金子正次	7票
時任三郎	3票
内田裕也	3票
坂本龍一	2票
緒形拳	2票

### ★主演女優賞

永島暎子	7票
原田知世	5票
夏目雅子	4票
大谷直子	4票
吉永小百合	3票
田中裕子	3票

### ★助演男優賞

伊丹十三	11票
伊武雅刀	4票
阿部雅彦	3票

### ★助演女優賞

田中美佐子	5票
由紀さおり	4票
加藤登紀子	3票
美保純	3票

# ベストテン集計表

北見	桑原	古東	塩田	柴野	鈴木木	鈴木村	高島	田中	塚崎	津田	野村	服部	林	藤田	牧村	町野	松村	山口	弘原海	計
10	9	9	10	9	2	10	9	9	8	8	5	10	10	9	6	10	3	8	6	253
	4	10	9	10	4	5	4		9		6		7		2	9	9			126
	10	6	6		9		10	8								8		7		123
2	3			7		6	6	5	1	10			6		7	7			5	92
			7	6			3	2	10	7	7			7			6	6	4	91
	7		5				8	4		4					3				1	78
		8	8		5		5				4	5	5							74
8				5		8		3	5	9	9					6			10	72
5	8			3							10				10					70
3	5	1	3	1	10			6			1	8								66
6											8			10	5					63
7			4			3	7	10				2	1							58
9				8		7				6		4			8					49
									6					6			7		9	48
4		3		4	6	2											8	4		46
		7		2			2		4		3									38
																	10	10	8	28
					3											4				26
									3	5										26
		2				9														25

# 1983 年度 日本映画

		秋 本	足 立	池 田	井 ノ 部	鶴 飼	内 海	大 高	尾 形	小 田	小 野	金 子	岸	北 川
1	家 族 ゲ ー ム	7	5	8	8	7	8		10	10	4	10	10	6
2	時 を か け る 少 女				10	1	5	7			3	5	7	
3	竜 二	10			3			5		7	9	9	8	8
4	俺 っ ち の ウ ェ デ ィ ン グ		8	10		5							4	
5	魚 影 の 群 れ						9	8				7	2	
6	夜 を ふ っ と ば せ	3		7		10	3	10			8			5
7	十 階 の モ ス キ ー ト	9		6		2			7	3	1		6	
8	細 雪						7		1					1
9	ダ ブ ル ベ ッ ド					9			3	9		3		10
10	戦 場 の メ リ ー ク リ ス マ ス		4			8			9	1		6		
11	シ ョ ン ベ ン ・ ラ イ ダ ー			9	2		10	4						9
12	も ど り 川			4		6		9					5	
13	つ っ ぱ り 清 水 港	1					6							
14	時 代 屋 の 女 房		6	5									9	
15	天 城 越 え		2		6							4	3	
16	み ゆ き		9			4			5					2
17	居 酒 屋 兆 治													
18	縄 と 乳 房		10									2		7
19	陽 暉 楼	8					2		8					
20	伊 賀 野 カ バ 丸				5				2		7			

一九八四年、エジソンのキネトスコープ誕生から九〇年目に、ヨコハマ映画祭は記念すべき第五回目を迎えました。でも私たちは、既に六回目の映画を見始めています。映画はますます面白くなってきます。私たちはまだまだ走り続けます。

では、お世話になった方々、ご協力戴いた方々、そして参加して下さった皆さんに、心をこめて第五回ヨコハマ映画祭をお届けします。

(林)

林真木夫、鶴飼邦彦という二人の映画ファンと語らい、それに今は閉館してしまった京浜映画劇場の藤沢公明支配人がのって来てささやかに始まったヨコハマ映画祭も、早くもというか、ようやくというか、5回目の誕生日をむかえることになった。

いろんな事があった。たった3人の映画ファンが、だいたいそれだ映画祭を開こうというんだから、いろんな事があって当然だった。

思い出すだけで頭にカッーと血ののぼってくるような

苦い記憶もある。生涯忘れ得ぬような、あたたかな嬉し  
い思い出もできた。

とにかく続けることで、映画祭の存在を証明しようと  
しゃにむに突っ走ってきた。

これでよかったのカナ、とも思ったりするが、岐路に  
立った時、映画を愛する一念で真摯に進むべき方向を模  
索しながら牛の歩みを続けて来たつもりだ。

会場は三回も変わった。まるでジプシー映画祭だ。

多くの人と映画祭を通じて、めぐり逢えた。

スタッフの中には、なんらかの事情で脱落していった  
人もいる。

新しいステキな友人もできたりした。

畏友・林真木夫とボクは、相変わらず映画祭をやっている。

(鈴村)

●イラスト 須田あずさ

「第5回 ヨコハマ映画祭」

昭和59年1月29日発行

発行兼 編集人 「ヨコハマ映画祭」実行委員会

☆お楽しみ抽選券☆



497

☆ 卷之三 北平杂记 ☆

704



前田陽一様

ヨコハマ映画祭 イベント内容

	内容	ご出席者
12:00 ~ 12:25	<p>新進スター座談会</p> <p>司会(高橋・太田)が「着席後 おひとりづつ お呼びしますので、順に上手よりご着席下さい。</p> <p>「出演作について、今後の予定、抱負、どんな俳優をめざすか」等について司会進行に従がいお話し下さい。</p>	<p>吉宮君子様 小川菜摘様 青木琴美様 仁科まり子様 佐藤志穂様</p> <p>11:50 に ぞこにスタンバイして下さい</p>
13:00 ~ 13:55	<p>表彰式</p> <p>司会(高橋・太田)が「各賞ごとにお呼びしますので、ステージ中央へお進み下さい。審査委員長(金子)が表彰状を、プレゼンター(白川様)がトロフィーを、実行委員会より花束を贈呈致します。その後司会が感想をおききますのでひとことお願いします。ご着席は上手より順にお願いします。</p>	<p>プロダクション RYUJI 様 13:05            崔洋一様 13:10            前田米造様 13:13            宇沙美ゆかり様 13:16            原田知世様 13:19            田中美佐子様 13:22            伊丹十三様 13:25            永島暎子様 13:28            松田優作様 13:31            森田芳光様 13:34            佐々木史朗様 13:39            吉田鋼二郎様 13:44  <u>前田陽一様</u> 13:47            金子朋子様 13:50</p>
14:00 ~ 15:20	<p>座談会</p>	<p>司会(秋本鉄次) 宇沙美ゆかり様 14:00 ~ 14:10            司会(北川れい子) <u>前田陽一様</u> 14:10 ~ 14:20            司会(秋本鉄次) 田中美佐子様 14:20 ~ 14:30            司会(北川れい子) 崔洋一様 14:30 ~ 14:40            司会(塩田時敏) 永島暎子様 14:40 ~ 14:55            プロダクション RYUJI 様            司会(鈴木F+L) 原田知世様 14:55 ~ 15:05            司会(野村正昭) 佐々木史朗様、森田芳光様 15:05 ~ 15:25            前田米造様、松田優作様、伊丹十三様、白川和子様</p>